

# 「途上国」における「女性運動」の諸相 — ネパールを事例にして —

佐野麻由子

## ＜ キーワード ＞

ネパール、女性運動、開発と女性、女性役割の再定義、コミュニティ

## ＜ 要 旨 ＞

各国の女性運動/フェミニズムはジェンダー関係を変革し、差異を解消するという点で何がしかの共通志向をもつと想定されがちであった。しかしながら、このような思考に固着することで、価値志向の多様性、運動の内実の多様性を閑却してきた。

本稿では、地域の問題点を出発点とし、その活動の過程でジェンダーに関わる諸問題を扱うに至った2つのNGOを事例とする。Lumanthiは地域住民の能力の醸成を主たる争点として捉え、その達成に男女平等が不可欠であるという認識にたち、地域向上のためにジェンダー関係の変革を志向する。一方、WEPCO (Women Environment Preservation Committee) は地域の環境整備を主たる争点として捉え、活動の過程で女性の性別役割分業を再定義するに至った。両者の事例は、地域に密着して日常的な課題を解決するというプロセスを通して間接的に既存のジェンダー関係を再構築しようとする運動の新たな可能性を示唆する。

### 0. 問題の所在

女性運動は、広義に女性を中心とするジェンダーにまつわる資源配分、社会規範や価値体系の変革を求める組織的・集合的活動と理解される。各国の女性運動/フェミニズムはジェンダー関係を変革し、差異を解消するという点で何がしかの共通志向をもつと想定されがちであった。しかしながら、このような思考に固着することで、女性たち自身に「一見普遍的に共有されているかのように思われる価値志向の多様性、運動の内実の多様性を閑却してきたのも事実である。本稿では、1950年以降ジェンダーの争点化が西欧の開発アプローチをとり入れた政府主導のもとでなされ、1990年の民主化以降は国際開発援助・政府の政策に加え、草の根の女性団体、INGO・NGOなどの様々なアクターによって重層的になされているネパールを事例にとりあげる。そして、グローバルな価値観とローカルな価値観が交錯するネパールにおける2つのNGOの活動を事例に、これ

まであまり注目されてこなかった「途上国」の女性運動の諸相を描きだしたい<sup>1)</sup>。

### 1. ネパールにおける女性運動の歴史的展開

#### 1-1. 女性の地位の概要

ネパールは中国とインドの中間に位置し、面積147,181平方キロ(日本の0.37倍)の国土において雄大なヒマラヤ連峰から海拔100メートルに満たない熱帯のジャングルに至る多様な自然環境を有している。また、人口2,321万人(2001年現在)の約9割がヒンドゥー教を信仰しており、世界で唯一ヒンドゥー教を国教に定めている王国でもある。現在、これらの地域には、大きく分けてカースト制をもつインド・アーリア系<sup>2)</sup>の人々と独自の文化をもつ少数民族の実に総計30にも及ぶカースト・民族が混在しており[Bista 1989]、女性の状況も一様ではない。一般に、ヒンドゥー教を熱心に信仰するブラーマン、チェットリなどの上位カースト女性に関する穢れな

どの規範は厳しく、女性が受動的・隷属的であると言われている。それに対し、18世紀後半に始まった国家統合の過程で強制的にカースト制に組み込まれ、ヒンドゥー教を信仰するようになったモンゴロイド系民族の女性は、結婚や行動に関わる規範や浄・不浄の規範から比較的自由であり、意思決定権をもつと言われている[Bhattachan 2001: 161]。しかしながら、ネパール全体でみれば、女性が非識字層の62.5%を占めており[National Planning Commission Secretariat Central Bureau of Statistics 1999]、ジェンダー間の格差は依然存在する。また、妊産婦死亡率(MMR)は5.39%と他国に比して高く[Ministry of Women and Social Welfare 1999]、女性の平均寿命が男性よりも短い世界でも稀な国となっている[木村 2000: 156]。さらに、現在でも「男は世界を照らす、女が照らす場所といえば台所だけ(Chora bhaye sansar ujjalo, Chori bhaye bhanchha ujjalo)」、「妻といえば足元の塵のようなもの(Srimati bhaneko paitalako dhulo ho)」といった諺が示しているように、女性を自律的な主体とみなさないヒンドゥー教的女性観が存在する[Malla 2001: 186-187]。このようなヒンドゥー教的女性観は、法規制にも如実に表れており、全体として女性は不利な立場に置かれていると言える<sup>3)</sup>。

## 1-2. 女性運動と公領域におけるジェンダーの争点化

ネパールの公的領域におけるジェンダーの争点化は、それをとりまく政治的背景<sup>4)</sup>から(1)1950年までのラナ専制期、(2)1960年以降の事実上の王制であるパンチャヤット体制期、(3)1990年の民主化以降の大きく3つの歴史的期間にわけられる。

第1期において女性運動は、女性の地位向上をめざした地域密着の小さな運動から始まり、後半では反体制運動の中で大規模に展開された。ネパールにおける初の女性団体は、1916年に南部のタライで女性の政治的・社会的意識覚醒をめざして設立されたMahira Samit(女性会議)と言われている[Majorupuria 1991: 400]。その後、1940年代にインド女性の活動に触発されるかたちで複数の女性団体が誕生した。その多くが反ラナ体制を掲げた政治家の妻たちによるものである。このような点で、この時期の女性運動は権利獲得の土台としての民主化を求め

る反体制運動と密接な関わりをもっていた[Tawa-Lama 1997: 327]。

パンチャヤット体制が確立した1960年に、全女性団体は「開発政策」の推進と国民統合の名のもとにネパール女性機構(Nepal Women's Organization)に結集され、政府の監視下におかれた[Majorupuria 1991: 402]。その一方で、政府主導の参画推進政策と外国からの開発援助<sup>5)</sup>が女性の地位向上において重要な役割を演じることとなった。パンチャヤット初期、政府の関心は多様な地理的状況にまたがるカースト・民族の統合にあった。1962年の「ネパール憲法2019 B.S.」においてカースト・民族差別と同様に性差別の禁止が明記され、法的平等が保障された[Bhattachan 2001: 77]。しかしながら、政府が政策項目に女性をもちこみ、本格的な女性の地位見直しに着手したのは、国際的に影響力をもった「国連女性の10年(1975年~85年)」以降であった[Gyalpo-Lama 1997]。その間、女性は政策の視野から抜け落ちていたというよりはむしろ、「国家の礎である家庭のマネージャー」という狭義の枠内において政策の視野におさまっていたのである[Ministry of Forest and Agriculture, 1963; Ministry of Forest and Agriculture, 1966等を参照]。「国連女性の10年」を契機に、第6次5カ年計画(1980/81~1984/85)、第7次5カ年計画(1985/86~1989/90)においてはじめて開発過程に全人口の48.8%を占める女性を動員することの重要性、そのための環境や機会の整備の必要性が説かれた[Subedi 1996: 訳132]。そして、USAID(米国国際開発庁)がとり入れた開発への女性の参加・統合を提唱するWID(Women in Development)アプローチが、その後WAD(Women and Development)、GAD(Gender and Development)アプローチ<sup>6)</sup>が、ネパールにおける女性の参画推進政策として採用された<sup>7)</sup>[Pokharel & Mishra 2001: 4-5]。1976年には、ジェンダーを含む開発政策を制度的に展開するために全NGOが女王を長とする社会支援調整協議会(Social Services Coordination Council)の元に再統合された。そして、翌年には下部組織であるネパール女性機構の再編も行われ、女性団体は女性支援調整委員会(Women's Services Coordination Committee)の管轄下におかれた[Bhattachan 2001: 82, Gyalpo-Lama 1997]。1987年には、アメリカにはじ



まり徐々に学問領域を確立していた「女性学」がネパールにおいて初めて紹介されるに至った。しかしながら、「女性学」は国立のパドマ・カニヤ女子キャンパス家政学部における「女性と開発」分野の1科目として紹介されるに留まった [Pokharel & Mishra 2001: 4-5]。授業では政府の開発政策の一翼を担うための人材育成が目的とされ、女性の地位向上に必要な開発政策の計画・実行の教育といった実践的な面に力が注がれたのである [Subedi 1996: 訳195]。このような状況の中で女性の地位向上を目指した活動を行っていた女性は、ある者は体制側に身を投じ、またある者はそれを結実させるための土台である民主化運動に身を投じながら、現在の女性運動の土台を形成していった [Tawa-Lama 1997 を参照]。

第3期の1990年に民主化が達成され、公的空間における政治活動が可能となった。1992年には、政府は外国のドナーとの窓口として女性福祉省の下部機関である社会福祉協議会 (Social Welfare Council) を設置し<sup>8)</sup>、これまで規制を課してきた外国からの援助受け入れの構造的な整備を行った<sup>9)</sup>。それに伴い外国のドナーと連携する国内団体も増加した。現在のジェンダーに関する公論空間は、開発アプローチをとり入れた政府の女性政策、INGO・NGOといった様々なアクターによって構築されている。また、地域に根ざしたINGO・NGOを媒介にして都市・農村において「新しいジェンダー観」の萌芽がみられる<sup>10)</sup>。ネパールの女性団体は、まさにグローバルとローカルな女性運動の結節点だと言えよう [Tawa-Lama 1997: 330 を参照]。

現在の女性運動が民主化以前のそれと異なる点は、① 活動の争点が女性の日常に関わる問題に据えられている点 [Tawa-Lama 1997: 329]、② 民主化以前に周辺におかれていた下位カースト女性、少数民族女性の団体が登場し、運動の担い手が多様化した点 [Bhattachan 2001: 87] である。民主化以前の女性運動は、大きく政府の翼賛活動 (合法的活動) か、あるいは女性の地位向上の基盤となる民主化闘争 (反体制運動) に限られていた [Tawa-Lama 1997: 329 を参照]。民主化を契機に公的な場における自由な活動が保障されることによって、多様な運動の可能性が開かれたのだ。一方で、これまで制度的に一元化されていた女性運動が多分化し、争点、利

害関心における「分断」が顕在化したのも事実である<sup>11)</sup>。カースト・民族、政治的イデオロギーを超えた女性の連帯が新しい課題として議論されている [Sherchan 1997, Tamang 1997 を参照]。

## 2. ネパールの「女性運動」の位相—2つの組織を事例にして—

### 2-1. 女性運動とその争点

女性運動には女性を中心とするジェンダーにまつわる資源配分、社会規範や価値体系の変革を求める組織的もしくは集合的活動の意がある。例えば、Tawa-Lama は、ネパールにおける女性運動を女性に対する暴力、アルコール問題、女性の財産相続など女性の日常に関わる問題を争点とする「女性のための、女性としての、女性の動員」として定義する [Tawa-Lama 1997: 327]。掲げる争点、女性の動員においては多様な形態が指摘できるが、概して女性運動は主たる担い手を女性とし、ジェンダーにまつわる諸問題を争点におく組織的・集合的活動と整理できる。また、その争点は、(1) 性規範/制度、ジェンダー関係に起因する日常的な諸問題の変革と (2) 日常的な諸問題の背景にある性規範/制度、ジェンダー関係そのものの変革 の2つに整理できる [Moser 1996: 訳66 を参照]。本稿では、ジェンダーに関わる諸問題を扱いながらも、必ずしもフェミニズム・女性運動を冠していない2つのNGOをとりあげる。そして、争点、運動展開の過程に注目して新しい運動の可能性を考察したい。ここで扱うLumanthiとWEPCO (Women Environment Preservation Committee) はともに1990年代初頭に設立された草の根の母体をもつNGOである<sup>12)</sup>。両組織の出発点は直接的なジェンダー問題ではなく、スラムやゴミといった都市特有の問題にあり、その担い手も地域住民である。Lumanthiは地域住民の能力の醸成 (build up their capacities) を主たる争点として捉え、その達成に男女平等が不可欠であるという認識にたっている点で「地域向上のためのジェンダー関係の変革」と位置づける。一方、WEPCOは地域のリサイクル事業と環境整備を主たる争点として捉え、活動の過程で女性役割を再定義し、それを女性の地位向上につなげている点で「ジェンダー関係変革のための女性役割の再定義」と位置づけて分析をおこないたい。



## 2-2. 地域向上のためのジェンダー関係の変革— Lumanthi—

Lumanthi とはネワール語で「思い出」を意味する。この組織は1992年のカトマンズ近郊で起きたタイ航空機の事故で亡くなったネワール人建築家のラメシュ・マナングールの遺志を継ぐために1993年設立された<sup>13)</sup>。設立時の関心は都市の急激な人口増加と行政が関与しない都市のスラム問題・貧困問題にあった。その主たる活動は、多様なカースト・民族が構成するスラムと建物の老朽化が進む旧市街<sup>14)</sup>での下水道の整備、トイレの設置、道路の整備などのインフラ整備事業<sup>15)</sup>、清潔な飲料水の確保、衛生プロジェクトなどの基本的ニーズの充足である。これらの事業を継続的にかつ効果的に推進するためには住民の積極的関与が不可欠である。そこで、居住環境の整備と社会経済状況の改善を通しての地域の発展・地域住民の能力醸成を目的とした識字プロジェクト、リーガルリテラシー・プロジェクトを同時に開始したのである。そこにおいては、住民は単なる受益者としてではなく、地域改善の「主体」としての参加が要求される。とりわけ、「地域の発展には女性の参加とそれを可能にする環境整備が不可欠である」という認識にたち、女性の動員を可能ならしめるジェンダー・プロジェクトに力が注がれるに至った。その背景には、Lumanthi に資金援助しているドナー<sup>16)</sup>との関係や開発アプローチの流入といった外的要因も否めない。しかしながら、地域全体の向上を目指す以上、多かれ少なかれ通過するプロセスだったと言えよう。ジェンダー・プロジェクトには、小口融資、識字プロジェクト等の男女別のプログラムと男女双方を対象にしたジェンダーの学習会が含まれる。前者は、女性の日常に密接に関わるニーズを充足し、結果として新しいジェンダー関係構築の突破口となりつつある。チョウダ地区に住むニーラさんやカルナリ地区で女性グループのリーダーを務めるサルミラさんの話は、プロジェクトが女性に経済的な支援をもたらし、夫や家族との関係にも変化をもたらしたことを示している<sup>17)</sup>。

ニーラ・カルキさん

この地域では、会員が毎週金曜日に25ルピーを貯金しにきます。私はこの貯金プロジェクトでお店を出しました。金利で得たお金は家族の

ために使うと言うよりは、自分のために（洋服代）使っています<sup>18)</sup>。

また、プロジェクトへの関与は、経済的な効果だけでなく、プロジェクトにおいて与えられた「役割」を通して地域活動における「自信」を創出し、家族関係の変容をもたらした。

サルミラさん

リーダーになりたての頃は、信頼をえて貯金グループに人を集めるのが容易ではありませんでした。しかし、融資の方法は簡単なもので、次第に多くの人に参加するようになりました。現在では30,000ルピーまで融資が可能になるほどに成長したのです!! Lumanthi のプロジェクトでリーダーになってから、夫は家事を手伝うようになっただけでなく、Lumanthi の活動にも関心を示し、関与するようになりました<sup>19)</sup>。

Lumanthi が介入的に設置した男女双方を対象にしたジェンダーの学習会やプロジェクトの取り決めを行う地域の会合は、女性の公的領域参入の契機となった。ネワール民族の地域には現在でもグティと呼ばれる伝統的な自治会が存在し、冠婚葬祭など地域の行事はグティを単位として行われてきた。しかしながら、グティへの女性の参加は基本的に認められず地域の間から排除されてきたのだ<sup>20)</sup>。

サルミラさん

Lumanthi のプロジェクトが入る前は、男性中心のグティが地域内の取り決めを行っていました。現在は、街の環境整備をはじめとする活動を男女共に計画・実行するようになりました。むしろ、女性が率先して活動に参加し、男性がそれをみて参加するという感じです。Lumanthi が会合の場をもつようになって、これまで話をする機会をもたなかった女性も発言の場が得られるようになりました。男性は次第に女性の話を聞くようになり、女性自身も男性と話す際は感情的にならないように意識するようになりました<sup>21)</sup>。

ニーラ・カルキさん



この地域の道路整備事業も女性が中心となって行いました。その際、Lumanthi の資金援助のほかに小口融資の資金を流用しました。〔中略〕Lumanthi の活動が始まる前は夫が家の外に出してくれませんでした。しかし、道がきれいになる（プロジェクトの効果が顕在化する）ことで今では活動への参加を認めてくれています。

チェトナ・カルキさん

私には6人の娘がいます。家族や周りの人から息子を産めと言われます。私はそれに対して反発を覚えています。けれども（理解させるのは）難しいです。このような点で、まだまだジェンダー・バランスが足りないと思います<sup>22)</sup>。

Lumanthi が関与する地域の会合は、男性に「女性」を「地域の一員」と印象づける好機となり、即座にジェンダー意識を変えるものではないにしろ、意識の変容に寄与しているのだ。

#### 地域カテゴリーからの統合

地域内の向上を目指す活動においては、地域レベルでの性別役割分業に注意を払う必要がある。例えば、男性の仕事の都合上、女性が地域事業の中心的役割を担っているチョウダ地区のように Lumanthi の活動が女性の無報酬労働に偏る可能性を否めない。

ニーラ・カルキさん

この地域ではかつて男性グループも貯金プロジェクトを行っていました。しかし、タクシー運転手の仕事をもつ男性が多く、実際に会合に集まるのが困難です。そこで、現在は女性のグループのみで活動をしています。最近、女性でも子供の通学等の準備が忙しく会合に来る人が減りつつあります<sup>23)</sup>。

時に、「地域」が女性にとっては家庭の延長を、男性にとっては政治的な公的空間を意味することがある [Moser 1996: 訳 60]。このような点を考慮したとき、地域に依拠する活動を過大に評価することは避けるべきであろう。しかしながら、それでもなお、女性を「地域のメンバー」として地域事業に動員す

るアプローチは男女双方に「地域の一員としての女性」という意識の萌芽に寄与した点で注目に値する。「地域」というカテゴリーを前面にだしての活動は、女性のみを対象とするプロジェクト/運動とは異なり、即座に男性カテゴリーを排除するものとはならないからである。むしろ、地域の発展という点から、男女の資源の再配分を行っている点に新しい可能性を秘めているのである。Lumanthi は、狭義の「地域」活動に留まるのではなく、さらに各地域を包含する地域間のネットワークで支えられた広義の「地域」構築を目指している。それが3ヶ月に1度催される「私たちの社会/地域(ハムロ サマジ)」と呼ばれるネットワーク会合である。この会合には全17地域の代表約100人が集結し、各プロジェクトの成功点/失敗点を共有する。この会合は各地域が互いに刺激を受ける場であると同時に、「地域向上」という同じ目標をもつメンバーの認識を高める場でもある。それ故に運動の担い手、動員対象、争点がある特定のジェンダー・カテゴリー、狭義の「地域」カテゴリーに偏ることはない。カテゴリー中立的な「地域」に依拠する運動は男女双方の動員、ジェンダー間の資源の再配分において多大なる可能性を秘めているのである。

#### 2-3. ジェンダー関係変革のための女性役割の再定義 — WEPCO (Women Environment Preservation Committee) —

Lumanthi と同様に地域を出発点としているのが WEPCO である。ネパールでは、1990年以降、特に都市部において生活様式の変化からゴミ問題が深刻化しつつあった。近年、ゴミの量・質が変化したことに加え、「ゴミの始末は低カーストの仕事」「ゴミを出すところを見られたくない」といったヒンドゥー教に基づく浄・不浄の観念もあいまって道路や空き地などの公共の場に捨てられるようになったのである [田中 1997: 39-46]<sup>24)</sup>。そのような中で、WEPCO の前身でもある農村を中心に活動を行っていた CEAPRED (Center for Environment and Agricultural Policy Research, Extension and Development) がオフィスの周りの清掃、環境改善から地域へと視野を広げたのは1990年である。ボランティアの女性が300世帯を回りゴミ回収の仕組みを調査し、援助機関から資金援助を受け、各世帯か



らコンテナまでの隙間をうめる事業を開始した。そして、事業が軌道にのった1992年に地域住民に活動を委ねるかたちで、WEPCO (Women Environment Preservation Committee) として運営上独立したのである〔田中1997: 39-46〕。WEPCOの主たる活動は、家庭やオフィスのゴミ回収とリサイクル事業である<sup>25)</sup>。CEAPREDの中で活動を行っていた当時、「地域の環境改善を解決するためには家事をとりしきる女性の動員が不可欠」という前提にたち、その動員対象を「ゴミをどこに捨てるのか」の意思決定をしている女性に絞った。女性は動員の対象であると同時に、ゴミの分別やリサイクルについての啓蒙の対象でもあった。

会長のシャンティさん

活動の主な対象は女性です。特に家庭ゴミの分別収集をはたらきかけます。〔中略〕学校に赴いて子供には環境の授業を、主婦にはゴミを減らすトレーニングを行うことが当面の目標です<sup>26)</sup>。

しかしながら、WEPCOは活動の過程で女性を単なる動員すべき資源として、あるいは啓蒙の対象としてではなく、「地域の主体」として参加を促進する方向へ転換しつつある。現在、組織で重要な位置を占めている女性もまた、WEPCOの活動を通して地域での「役職」を獲得するに至った。

ラニ・ドゥワルさん(バグマティ地区のスーパーバイザー)

この組織に入ったのは、やはりゴミ問題に関心があったからです。街をきれいにしたいと思いました。以前に仕事はしたことがありません。ここでのボランティアがはじめての仕事になります。

ミーナ・ギミレさん

WEPCOの仕事がはじめての仕事です。会員を増やして会費を徴収するのは難しい仕事です。〔中略〕夫や家族は活動に参加することに反対はしません。私たちは夫の仕事(INGO勤務・大使館勤務)で外国に住んでいたこともあり、家族は活動に理解があります<sup>27)</sup>。

活動に難なく参加できた女性がいる一方で、WEPCOへの活動参加が「家の外にでる」という越え難かった規範を破る契機になった人もいた。

パドマさん(副会長)

以前は、専業主婦で子供が学校に通っている間時間をもて余していました。(WEPCOの前身である)CEAPREDのトレーニングを契機に活動に関心をもつようになりました。この活動がきっかけで家の外に出るようになったようなものです。当初、収入が得られるわけではないので夫や家族には反対されました。しかし、WEPCOの活動が新聞やイギリスのBBCなどのメディアに取り上げられるようになって家族の理解を得ることができました。今では皆誇りにすら思っているようです<sup>28)</sup>。

WEPCOの活動の成功が意図せざるとも家庭、そして地域における女性の評価に寄与したことは言うまでもない。活動で中心的な役割を担っている女性自身の経験そして「自信」が、現在の第一の活動目標である「地域の環境改善においてリーダーシップを発揮できる女性の育成」に結びついたことは想像に難くないだろう。WEPCOの活動は、社会事業を通して地域での女性の発言権を高めるという意図を内包しつつあるのだ。

#### 2-4. 女性役割の再定義

WEPCOの「地域の環境改善を通しての女性の地位向上」という方針は、ゴミ回収/リサイクル事業を拡大する過程における女性の役割の見直しから生じたものと言える。そのような点でそのアプローチは性別役割分業そのものを批判の対象とするのではない。

パドマさん(副会長)

家事ですか? きちんとこなしています。こなさなければ、家族のサポートが得られません。みな、家事は女性の仕事だと思っているようです。WEPCOは、家庭のマネージャーとして女性がゴミに関して積極的にイニシアチブをとるという姿勢をとっています。しかし、女性だけがやるべきであるといっているのではありません





ん。もちろん、男性や子供を含んだ全ての人にゴミに関わるトレーニングを与える必要があると思います。女性だけを対象にしても効果はないのです<sup>29)</sup>。

性別役割分業を批判するというよりはむしろ、女性を「家庭のマネージャー」と位置づけて女性の役割に積極的な意味を見出すものである。そして、公的領域における政治的平等を得るための戦略として性別役割分業を再定義する。

パドマさん（副会長）

家事は必ずしも女性の役割だとは思っていません。しかしながら、実際にネパールの女性の多くが家の中、特に台所で一日の大半をすごします。ゴミの大半が家庭から出されることを考えると、女性はまさに「何がゴミなのか」を決める決定権を持っているのです。また、従来、女性は地域の活動で発言権を得ることができませんでした。女性が家庭や地域の環境美化で指揮をとることは、地域での発言権の拡大に繋がるのです<sup>30)</sup>。

公的領域における政治的平等を得るために性別役割分業を戦略として再定義することは一見矛盾に見えるかもしれない。また、女性が「家庭のマネージャー」という役割を負ったまま地域の活動に参加することは「家庭イコール女性の領域」というイメージを再生産する、あるいは強化する可能性を内包する。しかしながら、ネパールにおいて現実に多くの女性が性別役割分業を簡単に放棄できない状況にある。このような状況の中で地域を「男性の領域」と意識しつつ、家庭という「女性の領域」から少しずつその境界を修正していくという WEPCO のアプローチは、女性の地域参加を可能にする現実的な方策であると言えるのだ。たとえ性別役割分業の枠内であっても、「家庭のマネージャー」という指導的立場として女性自身によって再定義されたとき、それは単に既存のジェンダー関係を維持するものとはならないだろう。

### 3. 結びにかえて

本稿では、地域の問題を出発点とし、その過程で

ジェンダー関係の変革をその活動に内包するに至った2つの組織を事例に考察をおこなった。一つは、地域向上のためにジェンダー関係の変革を志向する Lumanthi、もう一方は、ジェンダー関係変革のために女性役割を再定義する WEPCO である。従来、狭義の「女性のための、女性としての、女性の動員」としての女性運動が、ジェンダー関係変革の主たる担い手として捉えられる傾向にあった。しかしながら、2組織の事例は、地域の問題を争点とする運動もまた、運動展開の過程で新たな男女間の資源配分に寄与する点を示すものである。ここにジェンダー関係の変革を第一に掲げなくても、地域の日常的な課題を解決する過程を通して間接的に既存のジェンダー関係を再構築する運動の可能性が示されたのである。今後、幅広い視点をもってジェンダー変革に携わる運動を見ていく必要があるだろう。

ネパールにおいては、開発が新しいジェンダー観の普及に重要な役割を担ってきた点は第1章で触れた通りである。女性運動が開発実践に反映される際、固定的な性別役割分業の変革が1つの課題とされてきた。かつて、1970年代に登場した WID アプローチが女性の状況のみを改善しようとした結果、ジェンダー問題の背景にある性規範/制度が軽視され、男女の不平等が改善されず成果を出せなかった経緯がある。それに対する批判から1980年代に登場し、近年主流化しつつある GAD アプローチは、固定的なジェンダー関係そのものの変更を念頭におく。GAD は女性をとりまく日常的な諸問題の変革をジェンダー関係そのものの変更へ到達する手段、あるいはその第1段階として位置づける [Moser 1996: 訳 264]。地域の問題を解決する過程でジェンダー・カテゴリーの是正を志向する Lumanthi は、この道程をあとづける好例と言える。一方で、環境整備という地域全般を包含する争点をもちながらも、活動の過程で性別役割分業を再定義しジェンダー・カテゴリーに強く依拠する WEPCO の事例は、女性役割へのコミットメントがジェンダー変革の一経路となる点を示した。ここで留意しなければならないのは、観察者視点にたった際に性別役割分業を強化し既存のジェンダー関係を維持するかに見える行為が、行為者視点にたった際に必ずしもそのように認識されていない。むしろ、女性役割に積極的な意味が付与され、それが状況に即した有効な戦略として採用され

ている点である。運動展開の過程における女性役割への積極的なコミットメントをむしろポジティブに捉え、多様な運動のあり方を見ていく必要があるだろう。

〈注〉

- 1) 本論文中で使う年号はネパール暦で換算しているため、西洋暦と1年のずれが見られる場合がある。
  - 2) インドから移住してきたとされているインド・アリア系の人々は、ブラーマン（司祭階級）、チェットリ（武士階級）と呼ばれる上位カーストと床屋、鍛冶屋、仕立て屋などの職業カーストを含む「ダリット」とよばれる低カーストを擁している。
  - 3) 現在の法規の基礎となっているのが、1854年に制定された国法「ムルキアイン 1910」である。ムルキアインは、様々な地理的・文化的背景をもつ国民を一元的なカースト・ヒエラルキーに統合し、当時、実権を握っていたラナ宰相一族に権力と利益を集中させる専制体制の基盤として制定された。またそれは、ジェンダー規範を盛り込んだ最初の成文法でもあった [Sangroula 2001: 108]。ムルキアインはヒンドゥー法典の影響を受け、婚姻、財産相続から刑法に至る項目において女性に差別的である [Malla 2001: 185-195, Sangroula 2001: 61]。
  - 4) ネパールでは、1769年の統一以降、ゴルカ王国、ラナ宰相一族の支配が続いた。1950年に王族主導の民主化によってラナ体制が崩壊した。1958年には、国王主導のもと、初の総選挙が行われ、わずかに8ヶ月の間であったが、初の複数政党内閣が誕生している。その後1960年には、王族のクーデターにより事実上の王制であるパンチャヤット政権が樹立され、1990年の民主化までの期間存続していた。
  - 5) ネパールでは1950年の開国を契機に、冷戦構造下でのその地理的重要性を活かして、アメリカ、ロシア、中国などからインフラ整備を中心とする多くの開発援助をとりつけていた [Bhattachan 2001: 77]。とりわけ、新生ネパールが国家統一を重要課題としていた1950年代には、開発政策においても道路建設通信網整備、電力開発といった経済・社会基盤造りの大型プロジェクトの実施に焦点が置かれていた [国際協力事業団 1993]。事実上の王制であるパンチャヤット体制が確立された1960年代においては、多様な地理的状況にまたがるカースト・民族の国民的統合が主要な課題となった。
  - 6) WID, WAD, GAD はいずれも「開発と女性」に含まれる諸概念区分である。「開発と女性」とは開発論と女性学から発生したひとつの研究および実践・運動領域であり、1970年代以降開発政策と結びつき発展してきた [田中 1995: 94]。
  - 7) ネパールにおいて WID, WAD, GAD アプローチは、それぞれ組み合わせられ使用された。それ故ま
- 8) 1999年の時点で、社会福祉協議会に女性奉仕領域 (women service) で登録されている国内団体は841にのぼる [Social Welfare Council 1999]。政府主導の女性政策下で開発現場の一線に身をおいていた女性とその先駆的役割を担っている点は興味深いことである [Tawa-Lama 1997: 330 を参照]。
  - 9) 民主化後、これまで義務付けていた資金提供者の政府機関の銀行口座への預金、ならびに、4ヶ月ごと72部の活動報告書の提出を廃した。そして、SWC への通知義務と6ヶ月ごとに1部の報告書の提出義務でドナーの支援が可能となった [定松 1998: 152]。
  - 10) 例えば、女性と暴力に関する活動をしてきた SAATHI は、生理中に実家を離れる「チャウパリ」の規範や生理中の女性を不浄とみなし家族成員との接触や寺院参拝などを制限する「ナチュネ」の規範を暴力と定義し、都市・農村で意識調査を行っている [Rana-Dueba 1997]。また、SLISHA はナラヤニ県の農村で「模範家族 (ナムナ・パリアール) 運動」と題してジェンダー平等を普及する活動を行っている。
  - 11) Sherchan は、90年代初期の人身売買をめぐる大規模な運動が、階級を反映したイデオロギーの分裂に終わったことにふれ、政治的イデオロギーを超えた連帯を今後の課題に挙げている [Sherchan 1997]。
  - 12) Lumanthi および WEPCO については執筆者がパドマ・カニヤ女子キャンパス家政学部ウイメンズ・スタディー・コースに留学していた2000年~2001年の間に聞き取り調査を行った。いずれも「地域の問題を出発点としていること」を選定基準としているが、前者に関しては知人が活動をしていた点、後者に関してはキャンパスの課外見学で訪れた点も加味されている。
  - 13) 建築家ラメシュは長年貧しい人々が少ない資金でも建てられる家を設計し、また無権利居住者のための活動を続けていた。そして、彼の死後、航空会社からの慰謝料をもとに、夫人のラジャナ氏を中心に友人十数人が集まり彼の遺志を継ぐべく Lumanti が設立された。現在、専従スタッフ25人 (女性20人/男性5人) が、カトマンズ盆地内のカトマンズ、ラリトプール、バクタプールの計17の地区で活動を行なっている。
  - 14) パタン、バクタプール、カトマンズではネパール統一以前にネワールの王国がそれぞれ都市国家を築いていた。当時のカトマンズ盆地の住民が「ネワール民族」と総称される人々である。パタンとバクタプールには現在でも、多くのネワール民族が伝統的な住居で暮らす。特に老朽化が進む地域にはネワールの清掃カーストや食肉解体カーストの人々が多く住む。
  - 15) Lumanthi が材料費などの75%を出資し、材料費の25%と労働力を住民が提供する。





- 16) ドナーとして Action Aid Nepal、オーストラリア大使館から一部資金援助を受けていた（常勤職員 of the Ganga Dangol 氏より 2001 年 5 月 1 日に Lumanthi で話を聞いた）。
- 17) 地区名、名前は全て仮名。以下同様。
- 18) 2001 年 8 月 3 日にチョウダ地区の地域会館内で話を聞いた。
- 19) 2001 年 5 月 13 日に Lumanthi のプロジェクトに同行した際に、サルミラさんの自宅内に設けられたミーティング室でネパール語からネパール語への通訳を介して話を聞いた。  
彼女は義理の両親と夫との 4 人で暮らしている。彼女は Lumanthi の海外視察プロジェクトでボンベイ、スリランカ、デリーをまわり「グループ貯金」について学んだ一人である。現在、小口融資で得た資金で八百屋を経営している。
- 20) 男性家族が死亡して存在しないときのみ、女性のグティへの参加が認められる。
- 21) 2001 年 8 月 3 日にサルミラさんの自宅前で話を聞いた。
- 22) 以上 2001 年 8 月 3 日にチョウダ地区の地域会館内で話を聞いた。
- 23) 以上 2001 年 8 月 3 日にチョウダ地区の地域会館内で話を聞いた。
- 24) 1980 年代には、カトマンズにドイツの支援で公共のゴミ捨て場としてコンテナが設けられたが、コンテナまでゴミを出しに行くという行為に抵抗を持つ人々が多く、うまく機能しなかった [田中 1997: 39-46]。
- 25) 現在、WEPCO は政府機関、大学勤務の夫をもつ専業主婦を中心に構成され、25 名のフルタイムスタッフ、15 名のボランティアと男性を含むゴミ回収、再生紙や肥料づくりにあたる 15 名の専門スタッフを擁している。地域に会員をつくり、少額の会費を得るかわりにその家のゴミを回収する。月額会費は個人か団体という区分とゴミの量を加味して設定される。収入の少ない人は月額 10 ルピー（1 ルピー約 1.7 円 2000 年当時）程度、一般家庭からは月額 30 ルピー、オフィスからは 400 ルピー～500 ルピーを受け取る。ゴミ回収の際に、会員には分別の努力を促す。回収した生ゴミはオフィス裏の畑で肥料として、古紙はオフィス内の製紙機で再生紙として、古布はハンディクラフトとしてリサイクルされる。これら肥料、再生紙で作られた封筒やハンディクラフトはオリジナルのナイロン製買い物袋とともにオフィスで販売され、重要な資金源となっている。今後、自己資金で活動することも目標の 1 つとなっている。
- 26) 2001 年 5 月に執筆者が当時留学していたパドマ・カニヤ女子キャンパスのウイメンズ・スタディー・コースのフィールド・トリップで、同組織を訪れた際に話を聞いた。
- 27) 以上 2001 年 8 月 27 日に、彼女たちの担当地域であったバグマティ地区を案内してもらっている際に話を聞いた。彼女たちは新会員獲得のために一日平均 4 時間担当地区を歩き回る。
- 28) 2001 年 8 月 24 日 WEPCO のオフィスにて話を聞いた。
- 29) 2001 年 8 月 24 日 WEPCO のオフィスにて話を聞いた。
- 30) 2001 年 8 月 24 日 WEPCO のオフィスにて話を聞いた。

#### 〈参考文献〉

- Bhattachan, K.B. 2001 Sociological Perspective on Gender Issues in Changing Nepalese Society, *Gender and Democracy in Nepal*, Modern Printing Press, pp. 76-94
- Bhattachan, K.B. 2001 Socio-Cultural Aspect of Gender Equality and Democracy in Nepal, *Gender and Democracy in Nepal*, Modern Printing Press, pp. 153-167
- Bista, Dor Bahadur. 1989 *People of Nepal*, Kantipur Offset Press
- Gyalpo-Lama, Thupten. 1997 Changing Status of Women: Reflections on the Women Movement towards Equality in Nepal, *Reflections*, 1 Winter 1997/98: pp. 28-29
- 木村雄二 2000 「ネパール病理医創世記—草の根研究からノーベル賞の夢」『ネパールを知るための 60 章』明石書店、pp. 153-156
- Majupuria, Indra. 1991 *Nepalese Women*, Craftsmen Press Ltd
- Malla, Sapana Pradhan. 2001 Property Right of Nepalese Women, *Gender and Democracy in Nepal*, Modern Printing Press, pp. 185-195
- Moser, Caroline O.N. 1996 *Gender Planning and Development: Theory, Practice & Training*, Routledge. (久保田賢一・久保田真弓訳 1996 『ジェンダー・開発・NGO—私たち自身のエンパワーメント』新評論)
- Pokharel, Bindu & Mishra, Mira. 2001 Gender and Democracy in Nepal, *Gender and Democracy in Nepal*, Modern Printing Press, pp. 3-12
- Rana-Deuba, Arzu. 1997 *A Situational Analysis of Violence against Women and Girls in Nepal*, SAATHI Collaboration with the Asia Foundation
- 定松栄一 1998 「NGO とエンパワーメント (ネパール)」『NGO がかえる南アジア』コモンズ、pp. 120-153
- Sangroula, Geeta. 2001 Law and Existing Reality of Nepalese Women, *Gender and Democracy in Nepal*, Modern Printing Press, pp. 59-75
- Sangroula, Yubraj. 2001 Women's Personality: Defined in Terms of their Sex and Marital Status, *Gender and Democracy in Nepal*, Modern Printing Press, pp. 105-118



- Sherchan, Kavita. 1997 Political Divisions Among Women's Group, *Study in Nepali History and Society*, No. 2 December 1997 : pp. 335-338
- Subedi, Prativa. 1993 *Nepal Women Rising* (高澤恵美子・辻本和紀子・寺元美保子訳 1996 「立ち上がるネパールの女性たち」花林書房)
- Tamang, Seira. 1997 Questioning Netribad, *Study in Nepali History and Society*, No. 2 December 1997 : pp. 324-326
- 田中雅子 1997 「ゴミ問題への挑戦」『アジア女性研究』6 : pp. 39-46
- 田中由美子 1995 「開発と女性」『地球規模の課題』pp. 94-119
- Tawa-Lama, Stephanie. 1997 Remarks on the Political within the Nepali Women's Movement, *Study in Nepali History and Society*, No. 2 December 1997 : pp. 327-335
- of Statistics. 1999 *Women in Nepal: Some Statistical Facts*
- शी ५ को सरकार वन कृषि मन्त्रलय कृषि भाग होम साइन्स सेक्सन (His Majesty's Government of Nepal Ministry of Forest and Agriculture Home Science Section) २०२० (1963) **सकसन वासर बाट लुगाको धुलाई** (衣類用洗濯棒について)
- शी ५ को सरकार वन कृषि मन्त्रलय कृषि भाग होम साइन्स सेक्सन (His Majesty's Government of Nepal Ministry of Forest and Agriculture Home Science Section) २०२३ (1966) **गर्भबति सबीका भोजन** (妊産婦の食事について)
- His Majesty's Government of Nepal Ministry of Women and Social Welfare. 1999 *Beijing Plus Five Country Report*
- 国際協力事業団 1993 『ネパール 国別援助研究会報告書』
- Social Welfare Council. 1999 *List of Non-Governmental Organizations Affiliated with Social Welfare Council*, 1
- 〈政府刊行物〉
- His Majesty's Government of Nepal National Planning Commission Secretariat Central Bureau
- (さの・まゆこ 立教大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程後期課程1年)